

# PORTA

ホルタ

2016 #022

一般財団法人長寿社会開発センター

特集

仲間となら  
もう一歩踏み出せる





## 放課後 ホイッスル

# 子どもたちの笑顔と 自らの趣味を両立する

子どもたちのおもちゃを原則無料で修理する。  
こうした「おもちゃ病院」の活動は全国に広まっている。  
2015年4月に開院した高知おもちゃ病院もその一つ。  
わずか1年で分院まで開くまでに至ったその経緯を聞いた。



2015年4月に高知市内に開院した高知おもちゃ病院。9月には南国市にも分院が置かれ、わずか1年で31名もの会員が活動するまでに成長した。「人に恵まれました」と語るのは、開設の発起人となった中越孝弘さんだ。

というボランティアをやっておられる方がいたので早速、連絡をとりました。

そうして知り合ったのが、同図書館の代表世話人を務める濱田百合子さん。高知おもちゃ図書館では、子どもたちが自由におもちゃで遊べるスペースを提供、おもちゃの貸し出しなどを行っている。

「連絡をいただき、いいお話だなと。私たちも、壊れたおもちゃを直す活動をしているんです。ですが、臨時のボランティアの方にお願ひするのがやっとなので、いつでもできるわけではありませんでしたか

ら」と濱田さんは語る。

### 地元紙を活用して募集

14年7月から準備を始め、翌15年2月末には、「おもちゃドクター」の説明会を開くことができた。募集には地元・高知新聞の無料欄「読者のひろば」欄に濱田さんが寄稿、威力を発揮した。

集まったのはメーカーの技術者だった人や、模型や無線などの趣味を持つ人が多かった。説明会では、電気や機械などの知識がある人でも、おもちゃ修理のために必要な工具の使い方や素材、接着剤、



高知おもちゃ病院

子どもたちの壊れたおもちゃを直すことで、物の大切さを教え、また子どもたちの交流を促すことを目的とするボランティア団体。2015年4月に高知市に設立、9月には南国市にも分院を開院した。16年2月末時点のメンバーは31名、平均年齢68歳。写真は2月27日の活動に参加したメンバー。



電池といった基本的な知識を養成講座で習得することで「おもちゃドクター」になれることなどを説明。結果、参加者34名の内24名が、3月27〜29日に行われた「おもちゃドクター養成講座」を受講した。

### 行政にも広報活動をかける

現在、高知診療所で毎月第2及び第4土曜日の10〜15時、南国診療所で第1及び第3土曜日の10〜12時に活動が行われている。

取材したこの日、高知診療所では9時からミーティング及び勉強会が開かれていた。ミーティングでは、イベント

参加の検討、受付に関する書類や手順など、活動全般について細かに討議される。また勉強会では、電気回路の仕組みなどについて詳しいドクターが実践を交えて講義する。

この活動の魅力は何か。院長を務める宮本典晃さんに聞いてみた。「皆さん、大好きなものづくりができ、修理したら子どもたちが喜んでくれる。これだけ趣味と実益を兼ねた活動は珍しいですよ」とはいえ、課題もある。それは多くの人に知ってもらわなければ利用者も増えず、せっかく集まった会員も手持ちぶさたになってしまうこと。

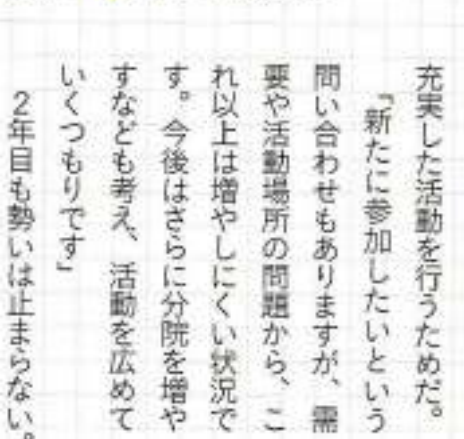
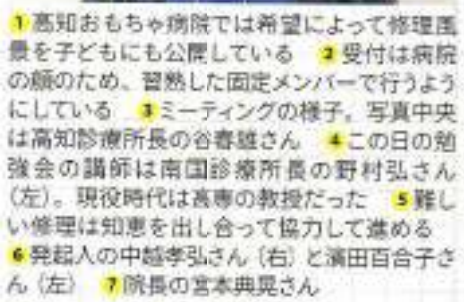
そこで、16年度は広報活動に力を入れるという。

「利用される方々への告知はもちろん、行政などに対する広報活動にも力を入れていきます。方法としては、可能性がある助成金は全て申請していくことが一つです」

申請をきっかけに、行政などに「こんな活動がある」と知ってもらおう。それがイベントなどへの参加を誘われる機会を増やし、利用者の増加につながるというのである。

また、この3月から高知診療所の開院時間を12時から15時まで延長した。利用者の利便性に加え、会員を時間差で配置し、空き時間を減らして充実した活動を行うためだ。

「新たに参加したいという問い合わせもありますが、需要や活動場所の問題から、これ以上は増やしていく状況です。今後はさらに分院を増やすなども考え、活動を広めていくつもりです」



1 高知おもちゃ病院では希望によって修理費用を子どもにも公開している 2 受付は病院の顔のため、習熟した固定メンバーで行うようにしている 3 ミーティングの様子。写真中央は高知診療所長の谷春雄さん 4 この日の勉強会の講師は南国診療所長の野村弘さん(左)。現役時代は高専の教授だった 5 難しい修理は知恵を出し合って協力して進める 6 発起人の中越孝弘さん(右)と濱田百合子さん(左) 7 院長の宮本典晃さん

2年目も勢いは止まらない。